

相談支援事業所 相談に関する報告 2010年6月 ～ 2010年9月

全体的な所感 (相談内容の傾向)	最近の相談傾向として、福祉サービスに関する相談よりも、住環境や食生活等の生活部分に関わる相談割合が多いと感じている。
連携の取れたケース や工夫したケース等	「交通事故に遭ってしまった」「ヘルパーの支援がないため困っている」といった緊急対応することがあった。本人1人では解決できない問題については、状況確認や連絡等支援を行った。また、必要に応じて、関係機関と協力し、専門機関へ相談に行くこともあった。
特に気になった点	1人暮らしをしている方で、食生活の偏りや飲酒・喫煙により健康面に影響が出ていると感じる。自炊をしているが、惣菜や炒め物といった味の濃い物や麺類、パンといった簡単に食べられる物が多くなってしまふことがあることが原因としてあげられる。医師から指摘しても自分で改善していくことが難しい場合、生活習慣全体で支援に入る必要がある。
障がい特性による課題	現状の生活で大きな問題はないが、自立に向けて「施設を出たい」「地域に出て生活をしたい」「障がいの重度化に伴い、住居の移転を考えている」という声があっても、本人の希望する住宅が見つからなかったり、入居条件があるため、現状維持となっている。バリアフリー住宅があっても、空きが生じにくい。住宅改修も考えられるが、予算が限られているため、難しいのが現状である。
地域の課題	生活介護、日中一時支援の利用できる施設が少ない。特に送迎を必要としている場合は、利用日が限定されてしまう。送迎の問題がクリアできれば、施設利用が可能となるケースもあった。施設側としては、車両と人員と送迎にかかる時間が問題としてあげられ、本人側としては、家族での送迎が困難であることやタクシー利用の場合費用負担が利用の妨げに繋がっていると感じた。通園・通学を含め、生活を送る上で移動手段は大きな課題になる。
その他	時期的に学校が夏休みであったためか、中高生と見られる人とのトラブルに巻き込まれることがあった。事件には至らなかったが、長期間での休みがある際は、特に見守り・目配りが必要だと思われる。

相談支援事業所 相談に関する報告 2010年6月 ～ 2010年9月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)</p>	<p>今年度も、本人だけでなく家族も高齢だったり障がいがあるなどして、キーパーソンと成り得る身内が不在のケースが多い。中でも他機関が何らかのきっかけで関わったことから連絡が入るケースが多いが、問題が複雑化していたり既に緊急性が高い状況に陥っていることがある。しかし、不都合が生じていたり必要性があっても支援がなかなか進展していかなかったり、状態が改善されてもすぐに戻ってしまうなど、キーパーソンの不在が様々な面で影響を及ぼしていることが多い。これについては、関係機関に繋がったときに支援に結びつく幅広い関係作りと、連携して見守りや介入をしていける体制作りが必要と思われる。</p>
<p>連携の取れたケース や工夫したケース等</p>	<p>複雑化した問題を抱えていても、福祉サービスの枠を超えて様々な関係機関と連携することで少しずつ進展したケースがあった。このような事例を通じて、いくつかの関係機関とより深い信頼関係を築けたことで、別のケースでも密に連携できスムーズに支援が進むことがあった。より多くの関係機関と事業所単位だけでなく、支援者同士も信頼関係を構築していくことの重要性を改めて感じた。</p>
<p>特に気になった点</p>	<p>虐待や触法など、本人だけでなく周囲の環境が起因となって問題が複雑になっているケースがあった。このようなケースでは、本人の問題を解決するために家族や周囲の抱えている様々な問題も整理していくことが必要となってくる。そのために、様々な関係機関と連携することはもちろんだが、導入部分では各機関の役割や連携の必要性を相談者が不安を抱かないように説明する必要がある。障がいだけ福祉だけに留まらない幅広い知識の修得に努めることが必要であると感ずる。</p>
<p>障がい特性による課題</p>	<p>触法や性の問題など、直面しているときには本人も問題意識を持てるが、時間が経つとまた同じことを繰り返してしまう場合がある。関係機関で本人の行動へのアプローチを続けていくことは必要だが、やはりそれだけでは改善は難しい場合が多い。本人だけでなく環境の調整にも配慮する必要があると考えられるが、地域の中では適した環境を個別に作り出すことは難しい。そのため、従来の関係機関だけでなく福祉以外の分野まで手を広げ、幅広い分野の支援者で地域に住む障がいのある方を支えていけるような体制作りが必要であると感ずる。</p>
<p>地域の課題</p>	<p>日中活動の場である通所施設を利用したいという相談が変わらず多かったが、やはり市内の事業所のほとんどは定員が埋まってしまっていて、利用できないケースが多かった。また、空きがあった場合でも、送迎が出来なかったり、公共交通機関をうまく使えないなどして利用に結びつかないケースも多かった。日中に居場所を持ってないことで様々な問題が生じることがあるが、それ以上に本人に意欲があってもそれを脱することが出来ない現在の状況は早急に改善する必要があると感ずる。各事業所による利用者の選択権を尊重したうえでの計画的な利用方法の検討と、既存の福祉サービスだけに頼らない日中の過ごし方も模索していく必要がある。</p>

相談支援事業所 相談に関する報告 2010年6月～9月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)</p>	<p>本人支援をきちんとしていくことで、家族や関係機関の負担は軽減されていくと感じている。段階的に、本人との疎通が上手く図れない場合においては、関わっている人たちと密に連絡を取り合いながら方向性の確認をし合うことで、支援を継続している。間接的な関わりであっても、本人への理解を深めていく過程も含めて大切だと考えている。また、1ヶ所での抱え込みをを防ぐことにもつながっているといえる。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>認知症が年々進行してきた家族に対してのサービス導入にあたり、介護保険課・地域包括支援センター・担当ケアマネジャー・障がい福祉課・通所施設、と連絡・調整を重ねながら、本人の不安の軽減を意識しそれぞれに働きかけていった。そういった動きの中で本人に対して各所で継続して電話や訪問での相談を行った。関係者同士がカバーし合えたことで、本人への安定した支援につながったと思う。</p>
<p>特に気になった点</p>	<p>相談者の中には、生活習慣病や身体的な機能低下が目立ってきた方も多くみえる。精神疾患の治療は継続されているが、健康診断を受けている方は少ないのが現状である。健康診断の受診に向けて、どういった方法であれば行きやすいのか？等を支援センターとして提案していければよいと思っている。</p>
<p>障がい特性による課題</p>	<p>病状に左右され引き起こされる言動については、本人への働きかけ自体が困難になる場合がある。周囲に対しても拒否的な感情が生まれやすくなり孤立することも多い。そういった場合に、関わりを断つことのないよう考慮し支援していく必要性を感じるが、医療機関や各関係機関、家族等にも状況を把握し理解してもらいながら、見守る体制作りを行っている。困った時だけでなく、日頃からの関係作りが大切であるといえる。</p>
<p>地域の課題</p>	<p>高齢の家族と精神疾患を持つ方が同世帯にみえる場合、担当ケアマネジャーが対応に困っているケースは多い。その方が未治療であったり医療中断しているケースであれば、支援センターに相談があっても支援の糸口を見つけることが困難な場合には、支援センターだけでなく保健所にも声をかけ、合同で相談面接を設定しそれぞれの機関の強みを活かした役割分担を行っている。今後、精神の部会でも連携を意識した関係作りを考えていけるとよいと思っている。</p>

相談支援事業所 相談に関する報告 2010年6月 ～ 2010年9月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)</p>	<p>夏休みで子どもが家にいる時期の相談は少ないが、子どもの発達に不安を感じて相談にくるケースは時期に関係なく多くを占めていた。年齢の幅も広くあるが、近頃は2～5歳の発達相談が特に目立つように感じる。</p>
<p>連携の取れたケース や工夫したケース等</p>	<p>生まれた時から何らかの障がいがある場合、医療機関との関係が主になっていることが多く、退院後など在宅で子育てに不安になっている、幼稚園や保育園での障がい児の対応など、どこに聞いたらいいのかわからないといったケースがあった。入院をしていて、健診(1. 6歳・3歳)を受けていないこともあったため、子ども政策課と連携を取り、相談者が安心できるようつなげた。</p>
<p>特に気になった点</p>	<p>6～7月は園や学校で(個人)懇談が実施されるが、それをきっかけに、はじめて子どもの様子を他人から指摘され、不安になり相談に来るケースがいくつかあった。反対に、診断を受けている子どもへの理解は、多少進んでいると思うが、現実はまだまだと思うところである。親としては、発達障がいの先入観を持たれず、子どもを理解してもらうにはどうしたらよいか、どのように伝えていけばよいか、と迷い悩む様子がうかがえる。</p>
<p>障がい特性による課題</p>	<p>園や学校の担任との関係に悩む相談は 保育や教育の場でも「発達障がい」という領域の理解度は、以前に比べると上がってきていると感じる。しかし、障がいの特性の前に、子ども一人一人の性格や気質があるため、一括りにできない現状があり、現場での迷いや不安は否めないと思われる。それが、保護者との信頼関係にもつながっているのではないかと感じる。保護者には子育ての中で出来る支援を伝えていき、教育機関とは、保育や教育の場でできる支援を一緒に考えていけるようなモデルケース的な関わりが理想であると感じる。</p>
<p>地域の課題</p>	<p>東部子育てセンターが近隣に開設となり、発達相談を希望している母親などが、子育てセンター経由で支援センターの方へ相談につながるケースが増えた。子育てセンターの方でも相談のニーズが高まっていると聞いている。深刻になる前の《ちょっと気になる》時期での相談が増えているように感じる。今年度の予定でもある「話せる場」「声をひろう場」の提供として、出張相談など、支援につなげる事も考えていきたい。</p>